14

寛永諸家譜

清和源氏乙五冊之内

義家流之内足利流

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186(14)	
函號	特 76	1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

喜連川 并 宮原 蔭山
吉良 一色 畠山 澁川
今川 品川
蒔田 瀬名 高林

寛永諸家系圖傳

清和源氏　乙一

義家流

足利流

喜連川　宮原

清和天皇第六王子

貞純親王

四品　中務卿　上総　常陸の太守

桃園親王と号して

淺草文庫

国立公文書館 National Archives of Japan

經基王

上総介　鎮守府将軍

天徳四年六月十五日はじめて源の姓をたまふ弓馬武畧に長じ六孫王と号して

満仲

正四位下　摂津守　鎮守府将軍

昇殿　歌人多田と号す　多田院を建立す

頼信

従四位下　鎮守府将軍

永承三年九月逝去

頼義

従四位下　伊豫守　鎮守府将軍

永保元年逝去

義家

正四位下　陸奥守　鎮守府将軍

八幡太郎ト号ス　母ハ上野介平

直方朝臣女

義國

式部大夫

母ハ中宮亮有綱女

義康

足利新判官

昇殿

義兼

従五位下　上総介

足利三郎ト号ス

母ハ熱田大宮司季範女

鑁阿寺

義氏
法樂寺

泰氏
宮内少輔
平石寺

頼氏
治部大輔
智光寺

家時
伊豫守
報國寺

貞氏
讃岐守
浄妙寺

尊氏
従二位
大納言
征夷大将軍

国立公文書館
National Archives of Japan

延文三年四月二十九日五十四歳にして薨

法名妙義　長寿寺と号す

贈左大臣従一位

義詮

征夷大将軍　京都将軍家

基氏

左兵衛督　従三位

文和元年十二月二十五日元服

貞治六年四月二十六日逝去

瑞泉寺殿玉岩昕公と号す

氏満

左馬頭　永安寺殿

応永五年霜月四日四十二歳にして

逝去

満兼

左兵衛佐

應永二十六年七月二十二日三十二歳にて

逝去　勝光院殿　泰岳道安と号す

持氏

左兵衛佐　従三位

永享十一年二月十日四十二歳にして死

永安寺において自害　長春院殿陽山

純公と号して

成氏

左馬頭　従四位下

明應六年九月晦日逝去　行年六十四

乾亨院久山昌公と号して

政氏

左馬頭　従四位下
享禄四年七月十八日逝去
甘棠院吉山道長と号す

高基

千光院

晴直

宮原　左馬頭　春敷院發願しける時
憲廣と号して　後に上総の宮原
に住す

義明

八正院

頼純

喜連川

慶長六年五月晦喜連川におゐて逝去　竜光院含山積公と号す

晴氏

右兵衛督　従四位

永禄三年五月二十七日関宿鴻巣におゐて逝去　永仙院系山統公と号す

義氏

古河　右兵衛佐　従四位

天正十年十二月二十一日古河の城におゐて逝去　香雲院長山善公と号す

氏女

義氏男子なきゆへ氏女その家を継ぐ

天正十八年関白秀吉関東下向の時

其家のすゝまんとすれ事をあはれ
ひて氏女をゆるし國朝にめあはせ
て其家をつがしむ國朝ハ八正院義明
の孫にして源家の同じながれなり
元和六年庚申五月六日氏女逝去
德源院殿峯晃公と号す

國朝

右兵衛督　八正院の孫頼純の子なり氏
女の夫となりて其家をつぐ
文禄二年秀吉高麗を討たまふとき
國朝秀吉にまみえんがため鎮西にあり
おもむくとて藝州まてくだりて病に
かゝりて卒

頼氏

左馬頭
兄國朝逝去ありしかば其家をつがん
ため文禄三年京都にて秀吉に

母なくし河秀吉又國朝が室氏女と
頼氏が妻としくし家をつぎし
慶長六年
東照大権現よりかわ御加増ありて知行千
石領須と
寛永七年六月逝去

義親
河内守
頼氏よりわ先に卒す

尊信
右兵衛督
父義親死去ありしよりかく尊信祖父の跡を
つぐ也
台徳院殿乃命によりかくなれ

義勝
弾正
祥雲院

義照

宮原　勘五郎

天正十九年

大権現のおほせによりて宮原を氏とし

上総国　宮原に居住す

慶長五年吉田陣のとき

台徳院殿の供奉す

同七年正月死去

喜光院と号す

義久

勘五郎

兄義照が遺跡をつぎける

大坂御陣のとき

台徳院殿の御供に列し京まで発向し

大坂へおもむかずして二条の城にて御番

をつとむ

寛永七年十二月死去　法寶院と号す

晴克

右京進

母ハ武田勝頼がむすめ天正十年六歳にて
甲州より駿州の田中まいられ
大権現のおほせによりて高力権左衛門へ
あづけられ二十人扶持をたまはられ其
後慶長七年
大権現の命によつて義久が妻となられ

元和六年九月晴克はじめて
台徳院殿にまみゆ
寛永八年父が遺跡を拝領す

喜連川家の紋桐　幕二幅白
家原同前

国立公文書館
National Archives of Japan

蔭山

尊氏

征夷大将軍

基氏

鎌倉殿

瑞泉寺と号す

氏満（うぢみつ）

鎌倉殿（かまくらどの）　永安寺（ゑいあんじ）と号（がうす）

満兼（みつかね）

鎌倉殿（かまくらどの）　勝光寺（せうくわうじ）と号（がう）す

持氏（もちうぢ）

永享（ゑいきやう）十一年二月永安寺（ゑいあんじ）にてとひく

持仲（もちなか）

自害（じがい）す　長春院（ちやうしゆんゐん）と号（がう）す

上杉禅秀謀反（うへすぎぜんしうむほん）の時雪下（ときゆきのした）にてとひて自害（じがい）

満直（みつなほ）

稲村（いなむら）と号（がう）す

持氏（もちうぢ）同時（どうじ）に自害（じがい）

満隆（みつたか）

新御堂（しんみだう）

満貞
持仲同時に自害とも

篠河と号とも

僧満秀
日光山別当

女子
大御堂

女子
前大平寺
昌泰道安

義久
賢王
大若公と号とも
報国寺ておゐて自害

春王丸
濃州垂井におゐて自害とも

安王丸
春王と同時に自害

成氏
左馬頭
喜連川并宮原祖

僧成潤
大御堂

僧周昉
長寿院

僧守實
熊野堂

僧尊徹
若宮別當
雪下
蓮花光院

廣氏
播摩守
從五位下
はじめ持氏自害のとき廣氏之妻にて
乳母ありしがこれひそかに伊豆の國に
かくれ住て縁より蔭山氏のもとにより其家
ありしのちあらたに蔭山氏の
ひとゝなりし嫁して後の子蔭山の家を
継ぐ

廣親
尾張守
從五位下

廣忠
播磨守

家廣
長門守

忠廣
刑部左衛門尉

氏廣
長門守

女子
紀伊大納言頼宣卿水戸中納言頼房卿母

貞廣
因幡守
従五位下

持廣
左衛門佐

家紋　丸内二ツ引　替紋　沢瀉

国立公文書館
National Archives of Japan

吉良（きら）

荒川（あらかは）
居山

一色（いつしき）

今川（いまがは）

品川（しながは）

義家（よしいへ）
義國（よしくに）

義康（よしやす）
義兼（よしかね）

義氏（よしうぢ）

長氏

母ハ家の女房　従四位下
上総介 左馬助　足利五郎
新御堂殿と号せり
義氏が家督をつぐといへども病気にて
それ家督を泰氏にゆづりて三州
吉良の庄に隠居せり

義継

はじめハ吉良の東條に住せり其後渡唐しゝ
く帰朝の後世をのがれて奥州へ
下向して天子より奥州一方の管領となりき
義継が末流関東にありといへども吉良殿
名のれなし
東照大権現きこしめしおよばせまして吉良
氏ハ一人の高家たるべしとて仰ある
てより今ハ蒔田と号せり

泰氏(やすうぢ)
足利(あしかゞ)の祖(そ)

満氏(みつうぢ)
足利(あしかゞ)　上総介(かづさのすけ)　左衛門尉(さゑもんのぜう)
従五位下(じゆごゐげ)　吉良(きら)三郎

貞義(さだよし)

弥(や)太郎　従四位下　上総介　左京亮(さきやうのすけ)
法名(ほうみやう)省観(せいくわん)　實相寺(じつさうじ)と号す

満義(みつよし)
三郎　正三位(じやうざんゐ)　星殿(せいでん)　左京大夫(さきやうのだいぶ)
左兵衛督(うひやうゑのかみ)　寂光寺(じやくくわうじ)と号す
家傳(かでん)によれば武官(むくわん)の所(ところ)といへども
礼式(れいしき)他(た)にことなるゆへ星殿(せいでん)と申
執せらるゝこともありしより代々(だいだい)官位(くわんゐ)を

のぞまずとき

有信（ありのぶ）
弥三郎　右馬助（うまのすけ）

貞弘（さだひろ）
荒川（あらかわ）四郎

満貞（みつさだ）
三郎　治部大輔（ぢぶのたいふ）　右京大夫
従四位下　道興寺（だうこうじ）と号す

有義（ありよし）
四郎　右馬助　積善寺（しやくぜんじ）と号す
一色（いつしき）　畠山（はたけやま）　長吉（ながよし）等の祖

高義（たかよし）
東條（とうでう）　中務大輔（なかつかさのたいふ）　霊源寺（れいげんじ）と号す

満義ハ隠居の地に住して兄弟合戦して東條を押領せしと云し

朝氏

右兵衛督

光栄寺と号して

持長

長栄寺と号して

持助

功徳寺と号して

義藤

亀苑寺と号して

義春

善念寺と号して

持清
妙恵寺と号す

持廣
花岳寺と号す
實子なきにより西條義安をや
しなひ子とす

俊氏　三郎　従四位下　左兵衛佐
龍門寺と号す

義尚　三郎　従四位下　左兵衛佐
正法院と号す

義真（よしざね）
左兵衛佐
拈花院（ねんげゐん）と号す

義信（よしのぶ）
左兵衛佐
常楽院（じやうらくゐん）と号す

義元（よしもと）
三郎
左兵衛佐
松林院（しようりんゐん）と号す

実ハ義信（よしのぶ）が子（こ）なり義真（よしざね）義信（よしのぶ）両（りやう）人各
義尚（よしなを）在世（ざいせ）のうちに早世（さうせい）しけれバ
義尚（よしなを）が家督（かとく）をつぐ

義堯（よしたか）
乾福院（けんふくゐん）と号す

義郷（よしさと）
宝珠院（ほうじゆゐん）と号す

義安

三郎　上野介　花蔵主と号す

はじめ東條持廣が猶子として東條の家をつぎ義郷義昭早世の後西條の家断絶するによりて西吉良をかね領す

義昭

義定

上野介　生國駿河

母ハ松平信忠主女

寛永四年十二月におゐて病死　六十四歳

長松寺と号す

女子

母ハ上に同じ

今川範以が妻　範英が母なり大炊御門

大納言経頼に嫁して大納言経敦卿と
なる

義弥

上野母　右兵衛督　生国遠江
母ハ今川氏真女
慶長二年
台徳院殿と称し奉る
同十二年十二月二十四日従五位下に
叙し侍従に任ず
同十六年正月二十三日正五位下に叙
し従四位下に叙す
元和九年
今上御誕生の時御祝儀の御使として
上洛せしとき左少将に任ず
寛永元年　東福門院立后の時御
祝の御使として上洛のとき中将に
任ぜらるといへども之を辞す

同十四年九月二十七日江戸に九
東照大権現御遷宮のときの舞楽左
右より各かづけ物あり右の陵王ハ勅勘ある
中納言稙廣卿其の納蘇利ハ義孫
こまをひくことが毎年始の御祝
儀として　勅使下向并親王家摂家
門跡諸公家江戸へ参向の御礼の時
御前の披露毎度義孫これをつと
む又ハ御社参御紀詣のとき御禊

定安

御舞の役をつとむ
荒川右馬助　生国三州
元和五年二月
台徳院殿を拝す
同九年正月より御書院番となれとも
同年十二月三州におゐて五百石の
知行を拝領す
寛永十年六月武州におゐて二百石の

加増をたまはる

同十二年九月御書院番の組かしら

となる

同十二月ゆるされて布衣を着す

定堅

一色門跡　　　生國三州

寛永十三年

將軍家を拝す

義冬

若狭守　　左京大夫　　生國武州

母ハ今川範以がむすめ

元和三年

台徳院殿を拝す

寛永三年八月十八日従五位下

叙し同日侍従に任じ若狭守をかぬ

およそ御上洛のさいはしよまでく

禁裏仙洞へも参詣ス
将軍家出御のとき或ハ御太刀或ハ
御腰物の役をつとむ又御社参御
仏詣の時御裾御簾の役時にあわて
こも然れとも

詠清
鳥山八兵衛尉　生国武州
母ハ上よおうじ
寛永五年

今川
國氏
長氏二男　四郎
長氏の隠居の地を相續して今川と
称ス　國光寺と号ス

将軍家を拝しうくまいれ
同十四年正月御書院番となれとも
同十六年十二月御切米を拝領ス

基氏（もとうじ）

蔵人太郎（くらんどのたろう）　後乃國光寺と号せ（のちこくくわうじ）

常氏（つねうじ）

関口次郎（せきぐちじろう）

俊氏（とし）

入野三郎（いりの）

政氏（まさ）

木田四郎（きた）

経國（つねくに）

関口五郎

女子（によし）

基氏那賀郡児耶氏とやしなひて聟とせ（もとうじ　かごやし　むこ）

女子

基氏石川氏とやしなはく聟と次（しかはうじ　むこ）

頼國（よりくに）

三郎　式部大夫（しきぶたいふ）　修理大夫（しゅりのたいふ）

従五位下
中先代合戦のとき海老名の大将とし
て京都より相模川に下向してうち
死ス

頼貞
刑部大輔　掃部助　駿河守
従五位下
実子なきによりて範氏に譲与ス

頼兼
式部大夫　三河守　従五位下

法圓
圓光寺の僧　佛満禅師と号ス

範國
五郎入道　法名心省
建武四年濃州青野原におゐて合戦
のときさわかゝりしを馬につけて笠志郎

とす富士浅間の嘉瑞あらはれよりわく
なほ其よりこのかた子孫これを相続して
正覚寺と号して

範氏

五郎　上総介　中務大輔　従四位下
玄寿寺と号して

貞世

六郎　左京大夫　伊予守　従四位下
康安貞治の比侍所をうけ給はり
鎮西乃探題となる事十二年範氏
早世の後家督をつぐといへども泰範
よしありて海蔵寺と号して　鎌倉乃後

貞臣

遠江左京大夫　子孫瀬名と
あらたむ

貞継

名和伊豫守

貞胤

尾崎右京亮

氏兼

蒲原越後守

仲秋

乗木左馬佐

従四位下

法名仲高

氏家

中務大輔

早世

泰範

左馬助

上総介

長慶寺と号す

範政

五郎

従四位下

民部大輔

上総介

全林寺と号す

範忠

治部大輔　上総介　従四位下
寶思院と号せし
永享十二年将軍義教関東征伐の
ときに副将軍となれり

義忠

五郎　治部大輔　上総介
長保寺と号せし
文明八年横地勝間田党一揆をおこ
すにより塩買坂にてうち
死せり

氏親

五郎　修理大夫　上総介　増善寺と号せし
母は伊勢新九郎長氏が姉

氏輝

五郎　臨済寺と号す

実子なきによりて家督を義元にゆづれ

花倉主

氏輝死後家督を義元にゆづれ

ことをうらみて合戦におよぶといへ

ども終に敗北して後　花倉

にて生害

義元

治部大輔

永禄三年五月十九日尾州におゐて

討死　天澤寺と号す　時に四十二歳

女子二人

其ひとりハ中御門大納言の室そのひ

とりハ北条氏康が妻

氏真

太郎　上総介　母ハ武田信虎女

慶長十九年武州にて病死　年七十七

仙岩院と号ス

法名　宗誾

女子

母ハ上ニ同じ　武田義信妻

法名貞春

範以

高久

太郎　右馬助　母ハ小笠原氏康女

生国相州

慶長十二年城州にて病死　年二十八

徳勝院と号ス

品川新六郎　母ハ上ニ同じ　生国遠州

慶長三年

台徳院殿を詠しうしてまかれ

寛永十六年武州にて六十四歳にして

病死　松月院と号せ
今川氏ハ一人の外称号をゆるされ
さらさりしか
台徳院殿の鈞命にて品川と称せ

高如
品川内膳
寛永元年　生国武州
将軍家を拝したてまつる

高寛
品川主馬
寛永七年　生国同前
将軍家を拝したてまつれ

澄存
母ハ上にしるす　生国京師
三井大阿闍梨　若王子大僧正
聖護院准后道澄の弟子同二品親王
道晃灌頂の御師範大覚の大先達

女子

熊野三山検校道本山乃奉行なり

吉良上野介義定室義弥が母

直房

刑部大輔　侍従　従五位下

初ハ範英と号して　生國山城

母ハ吉良義康が女

慶長十六年

台徳院殿を拝したてまつる

寛永十三年十二月二十九日従五位下ニ

叙し同日侍従ニ任じ刑部大輔

となる

将軍家御裝束着御のとき毎度御

衣紋ニ伺候し出御の時あるひハ

御太刀あるひハ御腰物の役をつ

とむ

氏庸

西尾蔵人　　母ハ上におなじ　早世

寛永七年

将軍家を拝したてまつる

女子

母ハ上に同じ

大友右衛門督義親が妻

女子

母ハ上に同し

吉良上野介義弥が室

範明

左京

吉良　家紋桐

幕之幅白

今川　同前

国立公文書館
National Archives of Japan

蒔田

義家五代

義氏
足利左馬頭

義継
東條四郎
家傳云義氏が長男なり
奥州にありしく吉良と号して

經氏

上總介

經家

貞家

右京大夫

治氏

中務大輔

治家

飽間治部大輔

足利基氏の招によりて初て奥州より

鎌倉へおもむきするところ上州飽間郷を

給ふ

頼治
兵部大輔

頼氏
左京大夫

頼高

右京大夫

政正
右京大夫

成高
世田谷吉良と称して
関東の公方よりは武州乃世田谷相州乃
蒔田とを領しけるが家が衰て飽間より

世田谷にうつりすみて居住す

頼康

正四位下

左兵衛佐

氏朝

左兵衛佐

頼久

左兵衛佐　初め蒔田と号す
生国武州世田谷
天正十八年かつて凡集人参着まて
東照大権現をおしくしてまつれ
同十九年上総国のうちにおいて采地
千百石餘をたまふ
慶長五年関原御陣にしたがひ供奉す
同六年江州日野の内寺尻村にしてか
増七百石をたまふ　鈞命によりて

伏見御城今ハ係ぐろまの御番を勤しかとも
同十四年三月二十七日　病死

義祗

左兵衛佐　総社寺濱村にして生れ
父頼久死後江州の采地をさしあげ
て総社の采地千石を領せり
三宅なりし
慶長十六年

大権現
台徳院殿と称しまいらせ
大坂御陣のとき義祗幼少なりし故
家人をばりして本多佐渡守くみして
属して大坂にむかはしむ

義勝

左馬助
実ハ小笠原縫殿助長房が子なり頼久が

養子となれる蒔田と称す頼久が妻は
義勝が伯母なり
寛永四年より
将軍家へ仕へたてまつりて御小姓組の
御番をつとむ

家紋桐　幕紋三幅白

瀬名

今川の末流なり遠州瀬名に住すれ
ばなり改て瀬名と称号して貞世より
以前ハ流ましけるよ今川刑部太輔範英
系圖にて見えたり

貞世

正四位下　伊予守　駿河守護

九州の探題となり遠州　駿州　但馬

越前をあはせて十三州の守護しけり射御をよくし和歌の道にも長ぜり

貞昌

従五位下　右京大夫　伊豫守

遠州の守護しけり

貞相

従五位下　伊豫守　遠江の守護

範将

従五位下　伊豫守

貞延

従五位下　陸奥守　遠州の守護

一秀

従五位下　陸奥守

初ハ海増寺の法師なるに還俗して義秀
と号し遠州二俣の城に住ス

氏貞

従五位下　陸奥守　二俣の城ニ居住

氏俊

従五位下　右衛門佐
駿州瀬名に住居ス

義廣

関口刑部少輔

女子

岡崎三郎信康ノ母
築山殿と号ス

氏明

伊豫守　瀬名に住ス
母ハ今川義元妹

政勝

源五郎　十右衛門　生国駿州

天正九年

東照大権現を遞したてまつる

同十一年四月尾州小牧御陣にて供奉

慶長五年関が原御陣に供奉

元和二年四月十四日死

政直

市左衛門

大権現を遞したてまつる

慶長五年関が原御陣にて供奉

吉久

八郎右衛門　生国駿州

寛永五年

将軍家を遞したてまつる

貞正（さだまさ）

彦三郎

貞國（さだくに）

平右衛門尉　後に左衛門とあらたむ
母ハ葛山（かつらやま）備中守かむすめなり貞國（さだくに）か父母と
勝頼（かつより）の妻とよしみあつかりしかハ貞國母懐（くわい）
妊（にん）の内勝頼の妻（か）けいやくありてやしなひ
て子となされ勝頼（かつより）の妻ハ北條（ほうでう）氏康（うぢやす）のむ
すめなり貞國（さだくに）七歳の時勝頼自殺（じさつ）して貞國
元和
台徳院殿
将軍家に謁し仕へ奉る

貞利（さだとし）

小左衛門　　生國武州
寛永十二年
将軍家を拝し仕へたてまつる

同十六年御切米を拝領す

家紋　二引

衣服の紋桔梗

高林(たかばやし)

今川(いまがは)の末流(まつりう)なり

吉利(よしとし)

市左衛門尉　生國遠州(しやうこくゑんしう)

東照大権現にしたへつかまつれ

天正(てんしやう)六年武州(ぶしう)多東府中(たとうふちう)に御代官(だいくわん)と

なされ

慶長元年正月晦日死す行年七十二歳

吉次

弥市郎　市郎右衛門尉　生国同前
台徳院殿につかへたてまつる
慶長十八年大御番の組頭となる
元和八年六月二十日死す行年四十七歳

利春

弥市郎　河内守　生国武州
実ハ嶋田弾正利政が二男なり吉次これを
屋しなひ子として
元和五年
将軍家につかへたてまつる行年十六歳
寛永元年十二月晦日従五位下に叙す

家紋　篠の丸

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan